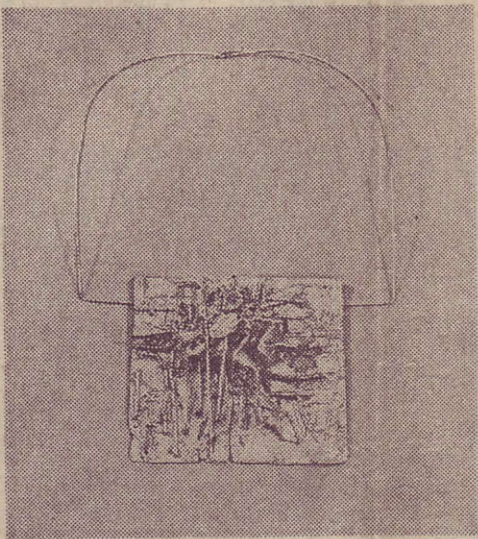


# 多彩・重量感の

あふれるアクセサリー



イタリアのアントン・フリーューハーフの  
ペンダント、<sup>3</sup>「巨大な」としか、いいよ  
うのない大胆なデザイン、素材は金板

## 国際ジュウリー・アート展から

東京・渋谷の西武百貨店で日本  
で初めての国際ジュウリー・ア  
ート展が開かれている（十八日ま  
で）。参加国は日本を除く十三万国  
で世界のおもだった国はほとんど

参加、デザインの粋を競っている。  
現代ジュウリーの考え方は、宝  
石を財産として見るのではなく、あ  
くまでもつけてみて楽しむものと  
いうところから発想している。た  
えば、イタリアのアントン・フ  
リーューハーフは、日本人の感覚か  
らいうと『巨大な』としか、いい

していないし、デンマークのナナ・  
ディッツェルは、シャープではあ  
るが重量感あふれるアクセサリー  
をつくっている。  
アクセサリーにも、クラシック  
な味わいのものと、現代調とい  
うかシンパルななかに力強い造形力  
を感じさせるものがあるが、前者  
はイギリスやフランスに多く、後  
者は北欧に見られる。北欧のもの  
は宝石より造形美を追求している  
点、より現代人にアピールする  
し、好かれるゆえんだろう。

日本の場合、宝石デザイナーの  
地位は低く飾り職人的イメージが  
まだ強いが、外国の場合、サルバ  
ルド・ダリの例もあるように、他  
の部門の美術家たちが、趣味とし  
てではなく本格的に取り込んで活  
躍している。とくに、彫刻家たち  
のジュウリーには造形的に興味あ  
るものが多く、イタリアのアル  
ノ・マルチナッツィのような前衛  
彫刻的などしか、いいようのない  
作品もあり、宝石のデザインも多  
彩になり、自分の個性に合わせて  
選択できるようになった。

よ

よ